



Data	
監督:	ロバート・ロドリゲス、フランク・ミラー
原作:	フランク・ミラー
脚本:	フランク・ミラー
撮影・編集:	ロバート・ロドリゲス
出演:	ミッキー・ローク/ジェシカ・アルバ/ジョシュ・ブローリン/ジョセフ・ゴードン＝レヴィット/ロザリオ・ドソン/ブルース・ウィリス/エヴァ・グリーン/パワーズ・ブース

👁️👁️ みどころ

モノトーンの劇画タッチの映像の斬新さにビックリ！アクの強い3人の中年男を中心としたドギツイ物語の展開にビックリ！そして、「シン・シティ」というあらゆる犯罪がはびこる街の面白さにビックリ！

そんな2005年の『シン・シティ』から9年。「復讐の女神」をストーリーの軸に据え、さらに過激さを増したパート2が登場！4つのエピソードからなるストーリーは、ロバート・ロドリゲスとフランク・ミラーが共同で監督、脚本、製作等をしたこともあって完ペキ。ドキドキ・ワクワクの連続だ。

文科省の推薦はムリだが、こんな大人のドラマ(?)からホントの人間を学ばなくちゃ・・・。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□あれから9年！劇画の面白さがさらに深化！ その1 ■□

フランク・ミラー原作のハードボイルドタッチの劇画が、白黒基調でスクリーン上にはじめて登場したのは2005年。『シン・シティ』（05年）は、メチャ面白い映画だった（『シネマルーム9』340頁参照）。また、これはフランク・ミラー原作のグラフィック・ノベルを映画化した『300 スリー・ハンドレッド』（07年）（『シネマルーム15』51頁参照）、『300<スリーハンドレッド> ～帝国の進撃～』（14年）（『シネマルーム33』202頁参照）と同じく、斬新かつ衝撃的な映画だった。

そこでビックリしたのは、第1に劇画タッチそのものの映像。「ブルーバック」とか「グリーンバック」と呼ばれる撮影上の手法を使えば、俳優が青い背景で演じた後のバックをいかにようにでも作れるわけだが、それによってスクリーン上にこんなにも自由に映像を作

り出せることにビックリ。前作もそうだったが、本作もすべてグリーンバックで撮影しているようだ。

■□■あれから9年！ 劇画の面白さがさらに深化！ その2 ■□■

第2にビックリしたのは、キャラの立った登場人物と劇画に相応しいドギツイほどのストーリーの面白さ。今風の邦画の主流を占める優等生的で、誰もが納得できる予定調和的なストーリーとは大違いだから、文科省推薦映画にならないことは確実だが、とにかく面白い。日本では、園子温監督が『ヒミズ』（12年）



(c) 2014 Maddartico Limited. All Rights Reserved.
2015年1月10日(土)TOHOシネマズ スカラ座ほか
3D/2D全国ロードショー

『シネマルーム28』210頁参照)、『希望の国』（12年）（『シネマルーム29』37頁参照）などの真面目な問題提起作とは別に、『愛のむきだし』（08年）（『シネマルーム22』276頁参照）、『冷たい熱帯魚』（10年）（『シネマルーム26』172頁参照）、『恋の罪』（11年）（『シネマルーム28』180頁参照）等、優等生路線とは正反対の映画を次々と作っているが、私はどちらかというと、そういう「反優等生的な」ものが大好き。

前作の評論は「これぞスクリーンで観る劇画！」としてかなり詳しく書いたが、あれから9年。また、前作では19歳のストリッパー、ナンシー役を可憐に演じた「ジェシカ・アルバのベスト作品」と書いたが、9年も経てば女も大きく変わるはず。そして、前作では「シン・シティ」を舞台に活躍する3人の中年男による3つの物語が描かれたが、本作ではその男たちは・・・？たしか、ブルース・ウィリスが演じたハーティガンは、死んでしまったはずだが・・・。

■□■「シン・シティ」にはどんなエリアが？ その1 ■□■

「シン・シティ」はフランク・ミラーが書いたグラフィック・ノベルのタイトルだが、その意味は「犯罪の街」。もちろん、これは『スワロウテイル』（96年）が設定した「円都（イエン・タウン）」と同じ、架空の街だ。ちなみに、園子温監督の『TOKYO TRIBE』（14年）では、族（トライブ）たちが命を懸けてブクロ、ムサシノ、シンヂュク等の「エリア」を守っていた（『シネマルーム33』未掲載）が、「シン・シティ」にも同じように、マーヴ（ミッキー・ローク）が生まれ育った貧民街があり、ドワイト・マッカーシー（ジョシュ・ブローリン）の古巣である娼婦街（オールドタウン）がある。

そこで、エピソード1では、「悪ガキどもを殺しても罪にはならない」と考えるマーヴが、ホームレスをいたぶる金持ち風の不良たちを貧民街に追い込み、壮絶な公開処刑を下すストーリーが描かれる。またエピソード3では、魔性の女エヴァ・ロード（エヴァ・グリーン）の妖艶な身体に溺れた挙句、瀕死の重傷を負ったドワイトが、古巣の娼婦街に逃げていくストーリーが描かれる。この娼婦街には、前作でもお馴染みのオールタウンの女王ゲイル（ロザリオ・ドーソン）、娼婦街最強の暗殺者ミホ（ジェイミー・チャン）、双子の高級娼婦ゴールディ、ウェンディ（ジェイミー・キングが2役）らが住んでいたが、彼女たちとドワイトとの絆は今なお健在・・・？

■□■「シン・シティ」にはどんなエリアが？ その2 ■□■

他方、衆議院が突然解散されることになったため、自民党は地方創生法案2法のみを成立させ、カジノ法案は廃案にすることにしたが、「シン・シティ」には当然、パクチ場がある。そこでエピソード2では、流れ者のギャンブラー、ジョニー（ジョセフ・ゴードン＝レヴィット）が、勝利の女神マーシー（ジュリア・ガーナー）を従えて、街の顔役で、絶対権力者のロアーク上院議員（パワーズ・ブース）とのポーカー対決に挑むストーリーが描かれる。

さらに「シン・シティ」には当然華やかなクラブもあるはずだが、前作同様、本作で重要な舞台として登場するのは場末のバー「ケイディ」。ここでは、前作で恋人のハーティガンを殺されたナンシー・キャラハン（ジェシカ・アルバ）がストリッパーとして挑発的な肢体をさらけ出しながら踊っているシーンが本作全体を通して登場するが、エピソード4はそのナンシーが主役となってロアーク上院議員への復讐を果たすストーリーとなる。その助っ人になるのがマーヴ、ドワイト、そしてゲイル、ミホ、ゴールディ、ウェンディたちだ。

『TOKYO TRIBE』でもブクロ、ムサシノ、シンヂュク等のエリア毎に住んでいる人種が全然違っていたが、それは『シン・シティ』でも同じ。本作を楽しむためには、まずそんなエリアの違いをキッチリ把握することが大切だ。

■□■多彩でクセのある登場人物に注目！ その1 ■□■

本作は劇画タッチの映像で、えげつないシーンが次々と登場するが、アクションシーンにはセリフはほとんどない。しかも、実際にそのアクションを展開するのはマーヴ、ドワイト、ハーティガンの3人がメイン。そして、この3人とも無口な中年男だから、セリフは最小限しかない。しかも、ハーティガンは前作で死んでいるから、本作で登場するのはほんの少しに限られている。そこで多用されるのが、この中年男たちの独り言（ナレーション）だ。エピソード1はとりわけそれが顕著で、「なぜ俺はここにいる？何をした？」というマーヴの独り言からはじまるストーリーは、ほとんどマーヴの独り言で綴られている。

■□■多彩でクセのある登場人物に注目！ その2■□■

そんな無口な男たちと対照的に口が達者なのが姦悪の女神エヴァ・ロード。彼女は口が達者なだけではなく、男が何を考えているかを瞬時に見抜く女だから、どうしたら男が喜ぶかを掴み、そのように行動することによってすべての男のハートを掴んでいく女だ。そして、前作から引き続いて、このエヴァとの愛に溺れる探偵がドワイト。前作でドワイトを裏切り、金持ちの男と結婚してしまったエヴァが再びドワイトに電話し、誘惑したのは、夫を殺害し、莫大な保険金を受領するためだ。そんな企みがあるとわかっていながら、エヴァの肉体に溺れてしまうドワイトはアホとしか言いようがないが、それこそが男の本性だから仕方ない。

なお、エピソード3にはエヴァをガードする従者のマヌート（デニス・ヘイスバート）が、ドワイトを1発でノックアウトしてしまう冷酷、残忍、無情な最強の執事として登場するから、それにも注目！さらに、ちょっと気の利いた刑事や生命保険会社の調査員なら、保険金目当ての殺人ではないかと疑うのは当然。そこで登場するのがモート刑事（クリストファー・メローニ）だが、エヴァにとってはそんな刑事を巧みな話術と魅力的な肉体でたぶらかすのはチョロイもの……。その結果、モート刑事も悲劇的な結末を迎えるのでそれに注目するとともに、日本の刑事さんはいくらでもこのようなワナに陥らないようご用心を。

■□■多彩でクセのある登場人物に注目！ その3■□■

他方、本作のエピソード2ではジョニーのポーカーの相手として、エピソード4ではナンシーの敵として大きな存在感を示すのが、ロアーク上院議員。去る11月4日に実施されたアメリカの上・下院議員選挙では、不人気なオバマ大統領のおかげで民主党が敗北し、上・下院とも共和党が過半数を制したが、このロアーク上院議員は民主党？それとも共和党？それはともかく、前作ではロアーク上院議員が将来の大統領候補と考えていたロアーク・ジュニアのイエロー・バスタード（ニック・スタール）が、11歳のナンシーの誘拐犯としてハーティガン刑事から追いつめられる物語が描かれていたが、本作ではそれを前提とする、ナンシーによるロアーク上院議員への復讐がストーリーの軸となるので、それに注目！

その他、前作と同様、本作にもクセのある奴ばかりが次々と登場するので、そのキャラをしっかりと楽しみたい。ちなみに、私が少し納得できないキャラはギャンブラーのジョニー。エピソード2で彼は2度にわたってポーカーでロアーク上院議員を完璧に打ち負かしたのに、なぜあんな悲劇的な結末に……？

去る11月10日、健さんこと高倉健が83歳で死亡した。任侠道に生きる男を描いた『日本侠客伝』や『昭和残侠传』シリーズでの健さんの存在感は際立っていたが、エピソード

ード2にみるギャンブラー、ジョニーの存在感もかなりものだった。「右手がつぶされても、左手があるさ」とばかりにロアーク上院議員を打ちのめす姿はカッコ良かったが、こうあっさりやられてしまっは・・・？しかして、そこではじめて明かされる、ジョニーとロアーク上院議員との驚くべき因縁とは・・・？

■エピソード4はオールスター総出で！■

前作でハーティガン刑事が非業の死を遂げたように、本作ではエピソード2でギャンブラーのジョニーが死んでしまう。しかし、エピソード3にみるドワイトは、エヴァの従者マヌートからとことん痛めつけられたうえ、エヴァから何発も銃弾を受けたにもかかわらず娼婦街に逃げ込み、彼は不死鳥のように蘇ってくるから、さあお立ち会い！スクリーン上で観ている限り、いくら野獣のマーヴでも大男のマヌートには勝てないのでは、と思っていたが、ドワイトの助っ人としてマヌートと対決したマーヴは、力まかせにマヌートの目ん玉をえぐり取ってしまうから、そんな超重量級の死闘にも注目したい。もっとも、本作のエピソード4における、ナンシーのロアーク上院議員への復讐を実現させるためのオールスター総出でのロアーク上院議員との対決を観ていると、エピソード1からエピソード3まではその導入部としての物語にすぎなかったことがよくわかる。

エピソード4では、刀や弓矢で活躍する娼婦街最強の暗殺者ミホや双子の高級娼婦ゴールデンディ、ウエンディたちの活躍もカッコ良く描かれるから、『キル・ビル～KILL BILL～Vol. 1. 1』（03年）（『シネマルーム3』131頁参照）『キル・ビル～KILL BILL～Vol. 1. 2』（04年）（『シネマルーム4』164頁参照）とよく似たテイストの彼女らのアクションにも注目したい。前作で死んでしまったため本作ではチョイ役しか出番がなかったハーティガンも、2人だけのロアーク上院議員との対決となったナンシーが危機に陥ったところで、タイミングよく登場してくる。私とそのシーンを見て思い出したのは、ブルース・リーの『燃えよドラゴン』（73年）。ハンとの対決のため鏡の中に乗り込んだブルース・リー扮するリーは鏡に映った敵に翻弄されながらも、最後には……。本作の総集編となるエピソード4では、そんなところでハーティガンが重要な役割を果たすのでそれにも注目したい。



(c) 2014 Maddartico Limited. All Rights Reserved.
2015年1月10日(土)TOHOシネマズ
カラ座ほか30/20全国ロードショー

2014（平成26）年1月20日記